

半世紀を超える米国報道
が評価され、先週、日本記者クラブ賞を贈られた松尾文夫(83)の予測は、「米中は平和共存、少なくとも戦争回避」である。

そう見る理由を松尾は近著「アメリカと中国」(新波書店、1月刊)に書き込んだ。この本には、「へえ」と驚く米中関係史の秘話が詰まっている。

◇

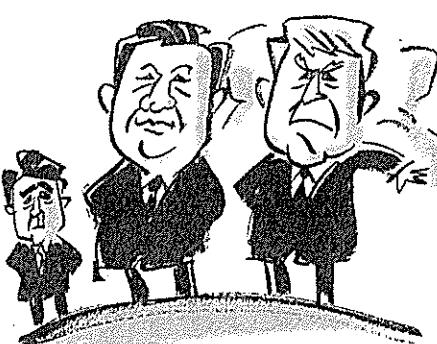
支局長。後年、関連会社の社長などを務め、2002年、フリーのジャーナリストとして活動を再開。この時、68歳だった。

「アメリカと中国」を書いた時の留学費用に充てた。

米中関係史と日本

この人は、米田尚首脳による広島と真珠湾の相互献花外交を提言。昨年、それが実った。受賞理由の一端はそこにある。

1956年、共同通信社に入社。64年以降、主に米国で取材。81年、ワシントン・船主はワシントン、ジエ



題字・絵 五十嵐晃

これは、トランプ大統領のトレーン、ピーター・ナバロが示唆する「米中必戦」論(邦訳「米中もし戦わば」文藝春秋)とは異なる見方。米中の未来は両説の間で揺れている。

谷間たる日本は、外交も、安保も重要——ということになるが、どの道を進むにせよ、「桂・タフト協定(1905年)」を知つておけ、と松尾は言う。

キッシンジャーの秘密交渉で世界を驚かせた二クソ訪中=米中和解を、松尾は「中央公論」(71年5月号)で予言していた。「少なくとも日本とは違う関係が、アメリカと中国の間にある。今も予測は難しい。アメリカの出方にかかるわらず、日本は東アジアの和解に努める時ではないか」と松尾。傾聴に値すると思ふ。(敬称略)

6月5日(月)
2017年(平成29年)